修士学位授与式式辞に代えて

2019 年度、2020 年度数学・数理解析専攻
専攻主任　泉正己

同窓会が発足以来同窓会主催の修士学位授与式が行われるようになり、その折に専攻主任が式辞を述べその内容を同窓会誌に掲載するというのが慣習になっていました。ところが私が専攻主任を務めさせていただいた 2019 年度と 2020 年度の 3 月には、新型コロナウィルス感染症の影響で修士授与式が行えず私が式辞を述べることもありませんでした。この原稿は、修士を終了して巣立たれた皆さんに、式辞に代えてお祝いを述べるものです。

新型コロナ感染症は 2020 年度の専攻主任の仕事に限っても、修士入学試験や修論審査会をすべてオンラインで行ったなど大きな変化をもたらしました。実際に行ってみれば新しい方式にも利点があることを感じつつも、能力の衰えを経験で補う私のような年寄りには大変なことも多くありました。裏を返せばこのような急速な変化の生じるときにこそ、皆さんのような柔軟な思考のできる若い方に大きな活躍の機会があり、また実際に活躍していただかねばならないのだと思います。

昨年来私が実感したのは、日本社会の状況変化への対応の絶望的な遅さです。例えば昨年半ばの時点で、与えられた状況の論理的帰結から、感染症対策に関する法の整備や、保健所制度に頼らないＰＣＲ検査体制の充実が急務であることはわかっていたはずです。しかし法律が改正されたのは今年 1 月ですし、PCR 検査に至ってはようやく政府が大規模な検査を議論し始めたところです。空気を読むのに終始せず論理的な帰結を堂々と主張するというのは、数学を学んだ皆さんが得意なことですが、まさにそうできる人材が社会の中枢に不足しているのだと思います。また、与えられた境界条件で解が見つからなければ境界条件を変える、という発想ができるのは、若さの特権だと思います。今後の皆様のますますの活躍をお祈りしています。